『中村哲氏の死を悼む』

2012年講演会チラシより

私たちがやらなければならないことは・・・

中村哲さんが襲われ亡くなったとの訃報が（2019年12月4日）マスコミに流れ、悲しみと共にただ唖然とするだけ・・

医師としてアフガニスタンとパキスタンの境に赴任し、医師として働くとも生きるための“水”がなければ、病気を治しても何にもならないことを知り、井戸を掘り始め、更に食料の確保のため“用水路”をつくり緑の農地を作り出してきた。その仕事はすばらしい行動で私たちが改めて見直さなければと思っていました。これまで船橋市・鎌ケ谷地区に何度か来ていただきお話を聞く機会もありました。「自衛隊を送ったら現地で活動するNPOやNGOがこまるだけ」「アフガン人は“日本は日本国憲法9条の国だ”との幻想を持っている」といった発言には考えさせられました。

そして日本の平和主義の内実は、中村哲さんのような医療活動、水（井戸）の掘削、用水路を作って農地を作りつづけるといった世界各地の人々の苦しい厳しい状況へのまさに“行動”で援助していくことなのでは・・・中村哲さんのペシャワール会だけでなく日本国の外交政策・国是である平和主義の実践としてより深く広く働きかけていくことだと思いました。

安倍首相の“積極的平和主義”は本来の意味とは真逆の武力で平和を作ろうとするもの。

中村哲さんの平和主義は現地に入って現地の人々の立場になって生命を守るため生活の復興の支援をしていくこと。

戦後日本の平和主義が9条を守るだけで9条の内実を十二分に実践してこなかったのが問題。その課題を体で表現してくれていたのが中村哲さんなのでは。

今いちど中村さんの行動の原点をさぐってみたく2010年出版の『人は愛するに足り、真心は信ずるに足る・アフガンとの約束』（中村哲さんと澤地久枝さんとの対話集）などを読み返してみました。

1983年からペシャワール会の現地代表。最初ハンセン症の患者さんへの治療のため入り、その後山岳無医村で医療支援を。しかし水の大切さを知り1600本以上の井戸を掘り更に「100の診療所よりも1本の用水路」と農地創設のための用水路建設に取り掛かる。73歳でなくなった時点で27ｋｍの用水路が出来16500ｈの農地が作り出され65万人の人々の暮らしを支えることが出来るようになったとのこと。最近ではJICAや国連機構との連携もなされていたようです。

《2013年当時》は、完成用水路25.5ｋｍ・3500ｈの農地・15万人の生命を支えることが出来た。その費用16億円は中村哲さんが集めた募金によってなされていました。その当時よく語っていたのが「憲法は守るものじゃない。実行すべきものです」「アフガンの人々は思ってくれている“日本は一度も戦争せずに復興を遂げた”と。他国に攻め入らない国の国民であることがどれだけ心強いことか」と。

国会での参考人としての発言の中に中村哲さんの行動の核心を読み取ることが出来ます。

《2001年10/13衆議院テロ対策特措法議論の参考人》として（対話集P10）

「病気は後で治せる。まず生きておれ、と水源確保に取り組んでいる。私たちが恐れているのは飢餓である。・・いま支援しなければこの冬市民が餓死するであろうと思われる。」「難

民援助に関しこういう現実を踏まえて議論が進んでいるのか・・テロという暴力手段防止には力で抑え込むことが自明の理のように論議されているが、現地にあって日本の信頼は絶大なものがあった。それが軍事行為、報復への参加によってだめになる可能性がある。」「“自衛隊派遣”が取りざたされているようだが当地の事情を考えると“有害無益”である。私たちが十数年かけて営々と築いてきた日本に対する信頼感が・・軍事的プレゼンスによって一挙に崩れ去るということがありうるわけです」。

《日本の日本人中心の考えに対して》(P110)

「日本人が死のうと、米国人が死のうと、アフガン人が死のうと死は死です。人に命は同様に尊い。そのことへの想像力が働いていたとは言えない。それが残念でした」

《2008年11/5参議院外交防衛委員会参考人として》(P114・P117)

用水路により緑の農地に

「私たちは医療団体ではあるが医療行為をしていて非常にむなしい。水と清潔な飲料水と十分な食べ物さえあればおそらく八・九割の人々は命を落とさずにすんだという苦い体験から干ばつ対策に取り組んでいる。この干ばつに加えアフガニスタンを蝕んでいるのは暴力主義。アフガン人の暴力があり、外国軍による暴力があり治安はひどく悪い。・・干ばつと共にいわゆる対テロ戦争という名前で行われる外国軍の空爆、これが治安悪化に非常な拍車をかけている。」「外国の軍事面の援助は一切不要でございます。・・治安問題というのは警察の問題であり軍隊の問題ではない。・・陸上自衛隊の派遣は有害無益、百害あって一理なしというのが私たちの意見である。」

《財源の問題について》(P156)

「それなりの財力がいるわけです。・・どれだけの人力を使っても出来ない。完成までには約15億円(24.3km完成時16億円)です。」「国連組織やODAにとっては涙金なんですよね。その辺をどうして考えてくれないか」

《澤地久枝さんが述べている》ように“中村医師は武力不要(無用・有害)、丸腰の貢献こそという、アフガン平和復興のモデルをひとつ作り上げた。「いのちの水」でよみがえる「復興アフガン」である。”(P228)

《西日本新聞(2019年12/2)に掲載された中村哲さんからのレポート》

「約18年前(2001年)の軍事介入とその後の近代化は結果が明らかになり始めている。アフガン人の中にさえ農村部の後進性を笑い、忠誠だの信義だのは時代遅れとする風潮が台頭している。・・国土を省みぬ無責任な主張、華やかな消費生活への憧れ、終わりのない内戦、襲い掛かる温暖化による干ばつ・・終末的な世相の中でアフガニスタンは何を掲示するのか、見捨てられた小世界で温まる絆を見出す意味を問い、近代化の更に彼方(かなた)を見つめる」。

私たち平和を希求する市民は日本国憲法の9条・前文・13条の平和主義をどう考えたのか?「憲法は実行すべきもの」をどれだけ戦後70年間実践してきたのか?中村哲さんのアフガンでの現場での実践からその思いを学び取り“ペシャワール会中村哲さん”の意志を生かしていきましょう。市民一人ひとりの力は小さく弱いものですが一歩を踏み出さなければ民主主義は成り立ちません。

“民主主義と自治そして平和主義”ふじしろ政夫　047-445-9144

＊活動報告ホームページに掲載「いい鎌ケ谷ふじしろ政夫」でアクセスできます。